


3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) デルフィニウムの生育初期の管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○デルフィニウムの生育初期の管理 ○シクラメンの管理 ○年末出荷電照ぎくの消灯 <p>9月15日に植え付けた‘さくらひめ’は(写真下)、12月中旬から1番花を出荷できる見通しである。12月～翌6月に連続出荷するためには、9月中旬～11月上旬に2週間間隔で定植を行う必要がある。どの定植時期においても生育初期管理は共通しており、次のア～ウに留意する。特に定植後10日までの管理が重要であり、管理の仕方では採花時期や品質に差が生じる。</p>  <p>写真 定植直後の‘さくらひめ’</p> <p>ア かん水管理 定植から1週間は土壌を乾かさないようにし、その後は徐々にかん水を控える。</p> <p>イ 施肥管理 活着後(定植後約1週間)に、チッ素：リン酸：カリ＝1：1：1程度とした液肥を、チッソ濃度100 mg/L (ppm)に希釈して施用する。風の強い日は葉からの水分蒸散が増大するため、葉水によるしおれ防止を心がけ、生育を促進させる。初期の肥料が多いと生育不良になるため、土壌分析を実施しECが0.3～0.5 ds/mの範囲になるようにする。</p> <p>※希釈倍率の算出 倍率＝成分(%) ÷ 希釈濃度(ppm) × 10,000</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) シクラメンの管理</p> <p>(3) 年末出荷電照ぎくの消灯</p>	<p>ウ 温度管理</p> <p>デルフィニウムに適した温度帯は昼温 25℃・夜温 15℃であり、10月は適温に近い日が多い。しかし気温の変化がまだ大きく、10月上旬は高温に、反対に10月下旬は低温に気を付ける。換気やサイドの開閉により温度を調節し、10月中旬以降は夜温が10℃以下にならないよう保温する。</p> <p>病虫害面ではうどんこ病、バッタ類やヨトウムシ類、ナメクジ、ホコリダニの防除を心がける。</p> <p>10月中旬以降は夜温が低下するため、15℃以下にならないよう保温・加温を行う。また、ハウスを閉めると灰色かび病の発生が多くなるため、暖房機の送風ファンや循環扇等で空気を循環させる。</p> <p>肥培管理は、チッ素：リン酸：カリ＝2：1：3程度とする。チッ素濃度で75～100 mg/L (ppm) の液肥を基本に、株の状態を見ながら施用する。また、幼葉の生長と花芽の充実、花首の徒長防止、さらに鉢のバランスを良くするために、月1回は葉組みを行う。併せて、病害の発生源となる枯れ葉を除去する。</p> <p>年末出荷用電照ぎくは、栽培温度条件や品種などによって異なるが、一般的には出荷予定日の50～60日前である10月上旬～中旬に消灯を行う。開花時の草丈は消灯時の約2～2.5倍となるため、消灯時には35 cm以上の草丈を確保しておく必要がある。</p> <p>うらごけ防止（上位葉の葉面積確保）や舌状花の増加など、切り花品質の向上を目的に再電照を行う場合、その日数分、通常の消灯日より早く消灯する。一般的には消灯後12日目頃に3～4日間程度、再電照を行う。実際は、花芽の発達ステージ（次ページ図）が総苞りん片形成期～小花形成期に達している頃に再電照しなければ効果が劣るため、再電照開始前に顕微鏡で花芽発達ステージを確認する必要がある。</p> <p>再電照により花首が伸びやすい品種は、花首の伸長を抑制するために、蕾が小豆大の頃にビーナイン（わい化剤）を散布する。</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>未分化 (0)</p> <p>生長点肥大 (1)</p> <p>総苞鱗片形成 (2~3)</p> <p>総苞鱗片多数 (3~4)</p> <p>小花原基形成 (5)</p> <p>頂部は小花原基未形成 (6)</p> <p>頂部まで小花原基形成 (7)</p> <p>花卉形成 (8)</p> <p>花卉伸長 (9~10)</p> <p>図 きくの花芽形成過程 (岡田、1963年)</p>

(作成 農林水産研究所)